

東京都東久留米市柳窪地区に残る武蔵野の景観 II

——土蔵の形式と特徴について——

The Yanagikubo District of Higashikurume City: Musashino Landscape Remaining in Tokyo II
The Format and Characteristic of the Dozo

住居学科 鈴木 賢次

Dept. of Housing and Architecture Kenji Suzuki

抄 録 2007年度に引き続き、2008年度にNPO法人「東久留米の水と景観を守る会」の依頼を受けて東京都東久留米市の柳窪地区の集落調査を行った。黒目川に沿ったこの地域は、屋敷林、農家の構えを残す屋敷地、そして周辺に畑といった光景が見られ、現在でも武蔵野の農村風景がよく残されている。前稿では集落と各屋敷内の建物で住宅部分となる主屋を取り上げた。各屋敷内には1～3棟の土蔵を見ることができたので、本稿では土蔵について取り上げる。農村集落の歴史的な環境が維持されている中で、土蔵は白壁が目立ち、この地の景観の重要な要素になっている。さらに各遺構は歴史的遺産としても貴重である。

キーワード：東京都東久留米市、柳窪、武蔵野、農村集落、屋敷林、土蔵

Abstract This study of the Yanagikubo district of Higashikurume City in Tokyo was carried out in 2008 at the request of the NPO, the Society of the Preservation of the Water and Landscape of Higashikurume, continuing the research from the previous year. In this area along the Kurome River, there are still a number of buildings with the appearance of traditional farmhouses, surrounded by trees and cultivated fields nearby. Their appearance is that of traditional Musashino agricultural villages, that remain preserved in modern Tokyo. My previous article concerned small agricultural hamlets and the dwellings that constitute them. Each of these houses also have a few dozo (storehouses with thick mud walls) which is the focus of this paper. The white walls of the storehouses, an eye-catching feature within this historical environment, are an important feature of the local landscape, and each storehouse represents an important historical legacy.

Keywords : Higashikurume City in Tokyo, Yanagikubo, Musashino, agricultural village, trees surrounding houses, dozo

1. はじめに

東京都都下の田園風景は急激な都市化、市街化によって急速に失われている。その中で、東久留米市の南西部に位置する柳窪地域(旧柳窪村)には、かつての武蔵野の風景を維持している希少な地区がある。この旧柳窪村は東久留米市の小平霊園内の水源に端を発した黒目川の源流域に位置し、寛文10年(1670)に柳窪村が成立した。畑作を主にした農村集落であった。現在でも、黒目川沿いに雑木林の緑

地が保全され、さらに農業を営んでいる屋敷が散在し、屋敷内には戦前までに建てられた主屋、土蔵、納屋などが数多く見出されるのである。

東久留米市においては、大正4年、池袋・飯能間の武蔵野鉄道(現西武鉄道)が開通している。東京近郊へと発展する始まりであった。しかし、昭和戦前までの市域の景観は、野(畑)、屋敷林(森)などの村落景観が広がり、明治期とさほど変わることはなかった。しかしながら、戦後、武蔵野の農業地帯から東京の近郊へと市街化が進み、35年(1960)

以降は大型団地が多数建設され、郊外住宅地が広がっている。

柳窪地区では市民によるNPO法人「東久留米の水と景観を守る会」(代表・佐藤雄二氏)や、地区住民の「柳窪の環境・景観の保全を考える会」が景観保全で活動を行っている。1995年、1997年には黒目川沿いの緑地が東京都の緑地保全地域に指定されている。日本女子大学家政学部住居学科鈴木研究室は、2007年度、2008年度に「東久留米の水と景観を守る会」から景観保全のための建物調査を依頼され、地区住民の協力のもと、各屋敷の建物調査を行った(2009年度も継続中)。

東久留米市では、すでに市域の民家調査を実施し、『文化財資料集(5)一民家編一』¹⁾(以下『資料集』とする)を刊行している。その対象は建築年代が江戸後期・明治初期と考えられ、しかも柳窪地区では規模の大きなものであった。2008年度の調査では、明治以降から戦前までの建物を調査対象にした。また、この地区の景観を検証する基礎資料として集落図を作成し、屋敷の景観について考察を行った²⁾。2009年度にはNPO法人「東久留米の水と景観を守る会」と、各屋敷の方々の協力のもとに、土蔵と蚕室・納屋などの付属屋の調査を行った。予備調査を8月1日、本調査を9月8～11日に行った。本稿は、その調査の成果として、とくに土蔵を取り上げ、その特徴を明らかにすることを目的としている。

2. 柳窪地区の土蔵の残存状況

土蔵は、主体構造が木造ではあるが、外壁を厚い土壁とし表面は白壁として、外側に木部を出さない防火建築である。入口や、窓の開口部は重厚な土戸による観音扉が納まり、火災時には隙間に目塗りの粘土を塗って火の進入を防ぐ。家財などを火災、盗難などから守るために建てられたものである。

土壁は真竹を縦横に組んで、縄を垂らし、荒土を何回も塗って厚さ20～30cmにしている。さらに漆喰を塗って白壁に仕上げるのが通例である。上部に鉢巻、下部の腰部分を腰巻と称してやや分厚くする部分がある。屋根は、荒土を厚く塗ってその上に木造の屋根架構を乗せて、茅や瓦などで葺く置屋根の場合と、軒先を塗籠にして瓦で葺く場合がある。前者の土蔵を鞆蔵、豆腐蔵と呼んでいる。

このような土蔵は建築費が高んでしまう。江戸時代初期、幕府は一般的な農民、商人などに対して贅

沢な建物として制限していた。江戸時代中期、大都市となった江戸において、大火が頻繁に起こった。そのため享保期以降、幕府は防火対策の一つとして土蔵造の建築を奨励した。それ以来、土蔵は江戸で普及し、農村部にも次第に波及することになった。

武蔵野の農村部は江戸に近いこともあって、江戸時代後期には土蔵が普及している。白壁は仕上げに漆喰を塗ったものである。その材料である石灰の産地が現青梅市内の上成木にあった。産地と江戸・東京の経路にあった武蔵野にとって、石灰の入手は容易であったろう。

各地においても明治期以降戦前まで土蔵は盛んに建てられてきた。現在、川越の町並みで見られる土蔵造を見ても、そのほとんどが明治期以降に建築されたものである。さらに、土蔵の外観を模した石造の蔵や煉瓦造の蔵も建てられるようになった。

柳窪の旧集落には、各屋敷内に戦前までに建てられた主屋、土蔵、付属屋などがよく残されている。土蔵は屋敷地内に2、3棟を設けている例がある。一方、土蔵を持たない屋敷もある。この地区で現在確認できる土蔵のうち18棟ほどが戦前までの建築である。なお、それ以外に数棟の鉄筋コンクリート造、または鉄筋で補強した石造が見られた。今回、調査ができた土蔵は戦前までに建築された土蔵の一部で、そのうち精査できた土蔵を表1の一覧表に示した。土蔵は2階建て、切妻の置屋根、妻入りで、正面側に庇状の吹放ちの下屋が付くのが外観の一般的な形式である。

3. 土蔵の事例

村野啓一郎家 A1 (図1～2, 写真1～2)

建築年代：江戸末期、規模：妻側2間・桁側3間、構造：木造、階数：2階、屋根：置屋根・切妻・鉄板葺、小屋組：牛梁に登梁、外壁：漆喰仕上げ。

天神前村野家は、土蔵が3棟現存している。これは敷地の西側、主屋の背面に位置し、梁間2間×桁行3間の妻入りの土蔵である。この蔵は敷地内に建つ3棟の土蔵のうち、主屋に最も近い位置に配されている。同敷地内の南庭に現存する土蔵A3とともに、柳窪集落でもっとも古い蔵の一つである。

正面入り口には下屋が付き、その反対側の一階の窓上部にも庇が付いている。窓は二階の正面側と背面側にも設けられている。正面妻部分の壁には家紋の丸に違い鷹羽の紋章がみられる。1階の床は地表

表1 調査対象の土蔵一覧表

記号	所有者	呼称	建築年代	規模(妻×桁)	階数	屋根			備考
						形式	葺材	小屋組	
A1	村野啓一郎	北蔵(金蔵)	江戸末期	2間×3間	2階	置屋根	金属板	登梁	
A2		中蔵	明治30年頃	2.5間×4間	2階	軒塗籠	瓦	—	茶室付属
A3		南土蔵	江戸末期	2.5間×4間	2階	置屋根	瓦	和小屋	
B	村野武敏	土蔵	明治30年代	2間×3間	2階	置屋根	瓦	登梁	
C1	村野成美	南土蔵(穀蔵)	大正期	2.5間×4間	2階	置屋根	瓦	和小屋	
C2		西土蔵(文庫蔵)	明治初期	2.5間×4間	2階	置屋根	瓦	登梁	登梁の上に丸太を並べ野地板を張る
D1	野崎市郎・陽一	西土蔵	江戸末期	2間×3間	2階	置屋根	金属板	登梁	
D2		南土蔵	明治初期	2間×3間	2階	置屋根	金属板	和小屋	
D3		味噌蔵	不詳	2間×2間	平屋	置屋根	金属板	和小屋	野地は丸竹を密に配す, 現外壁はモルタル塗り
E	野寄敏雄	土蔵	明治30年代	3間×4間	2階	置屋根	金属板	和小屋	東の上に梁, 全体で三重梁
F	奥住和夫	土蔵	明治初期	3間×4間	2階	置屋根	瓦型金属板	和小屋	同上

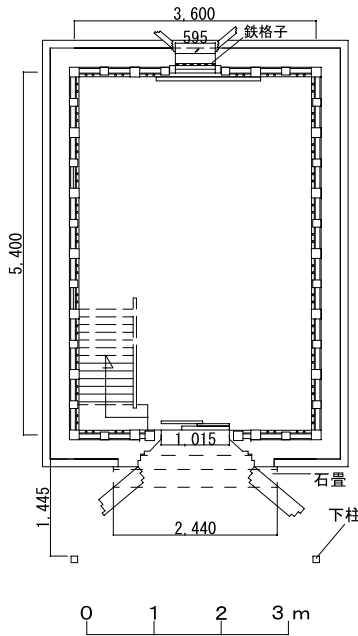


図1 村野啓一郎家土蔵A1 1階平面

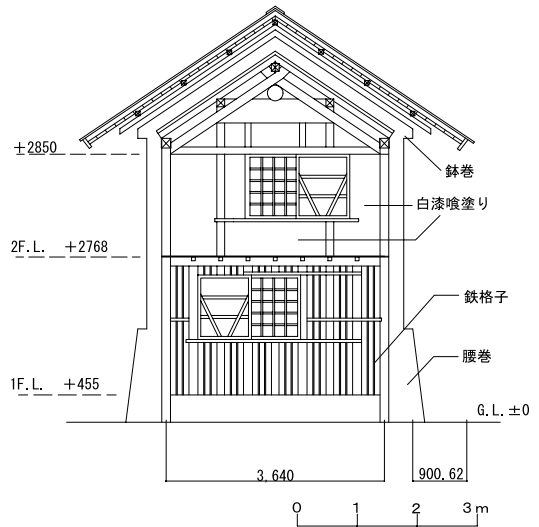


図2 村野啓一郎家土蔵A1 断面

面より高い位置にあり、板張りである。入口左側に2階へ上がる急な階段がある。小屋組は、牛梁と登梁によっている。

現在、1、2階部分は家財道具や生活用品が収納されているが、かつては「金蔵」と呼ばれていた。そのため、火災防止と盗難防止に特に工夫が凝らしており、1階部分は半間に2本の間隔で鉄棒が堅固

に張り巡らされている。また、1階部分は鉄格子付きの窓、入り口は外側に土を厚く塗った観音扉、中間部に漆喰を塗った片引き土戸、さらに内側に木製の格子状の引戸の三重構造とし、厳重なつくりとなっている。

村野家は、慶応2年(1866年)の武州世直し一揆で被害に遭っている。主屋が襲撃に遭い、主屋の背面に位置していたこの金蔵も襲撃に遭ったということであるが、破損した様子は認められず、保存状況はたいへんよい。主屋に近いことと、防犯に対処



写真1 村野啓一郎家土蔵A1 外観



写真2 同上土蔵A1 2階内部

した堅固な造りから、「金蔵」とされた理由をよく示している土蔵といえる。

村野啓一郎家 土蔵A2 (図3, 写真3～4)

建築年代：明治30年(1955年)頃, 規模：妻側2.5間・桁側4間, 構造：木造, 階数：2階, 屋根：軒塗籠・切妻・瓦葺, 小屋組：不明(天井有り), 外壁：漆喰仕上げ。

敷地内の南側, 庭に面して土蔵A3と隣接して建っている。梁間2.5間×桁行4間の妻入りの土蔵で, 正面入り口側に玄関と茶室が設けられている。屋根は瓦葺で, 軒先部分が外壁の鉢巻部分によって塗込められている。入り口は両開きの観音扉, 漆喰塗り

の片引き土戸, 木製の格子戸といった3重の戸が納まり, 重厚な構えの土蔵である。

内部は, 50年以上前に床材をひのきから栗材へ改修し, さらに現在2階部分には畳敷が見られる。1・2階とも当家の美術品が収納され, しかもきちんと陳列されていて, さながら小美術館のようである。ここには興味深い工夫として, 2階の床に木蓋が施されており, これを開けて滑車により大きな荷物を上げ下げすることができるようになっている。

本建物の屋根は置屋根ではなく, この地区ではあまり見られない軒先を塗籠めた形式である。多摩地域の土蔵の屋根の傾向としては置屋根形式が一般的であるのに対して, 本形式は明治期に建てられた川越の土蔵の形式に共通する。川越の土蔵の建築時期からすれば, 建築年代が下る構法と考えられる。なお, 2階には天井が張られているので, 小屋組みについては未調査である。

当主である啓一郎氏の聞き取り調査によると建設当初, この土蔵は, 土蔵前に居室を設けた, 蔵番付土蔵であった。蔵番を常駐させていた背景には, 村野家の人の出入りの多さや, 家財を守る必要性和安全性を確保したいという当家の様子がうかがえ, 蔵番を雇えるだけの豊かな経済力を示した建物となっている。

また, 現当主の母にあたる村野フクの時に, 蔵番の部分茶室に改造した。このことから, 家財を守る本来の目的とは別に, 家財を蔵から出し, 招いた客に披露することにもなったようである。茶を点て, 家財を愛でた。そのような風流が行われていたことに, 農民たちの文化的な側面が推察される。

現在では, 茶室はゲストルームに, 土蔵は個人ギャラリーになっている。先代から現在の当主まで, その用途を変化させながらも丁寧に維持管理が行われ, 保存状況はきわめてよい建物である。

村野啓一郎家 A3 (図4～5, 写真5～6)

建築年代：江戸末期, 規模：妻側2.5間・桁側4間, 構造：木造, 階数：2階, 屋根：置屋根・切妻・金属板葺, 小屋組：牛梁に登梁と和小屋併用, 外壁：漆喰仕上げ。

敷地内の南東側, 茶室付の土蔵A2に隣接して建っている。梁間2.5間×桁行4間の妻入りで, 屋根は鉄板葺で, 外壁は白漆喰仕上げとなっている。正面には鉄板葺の下屋が付き, 入り口には両開きの観

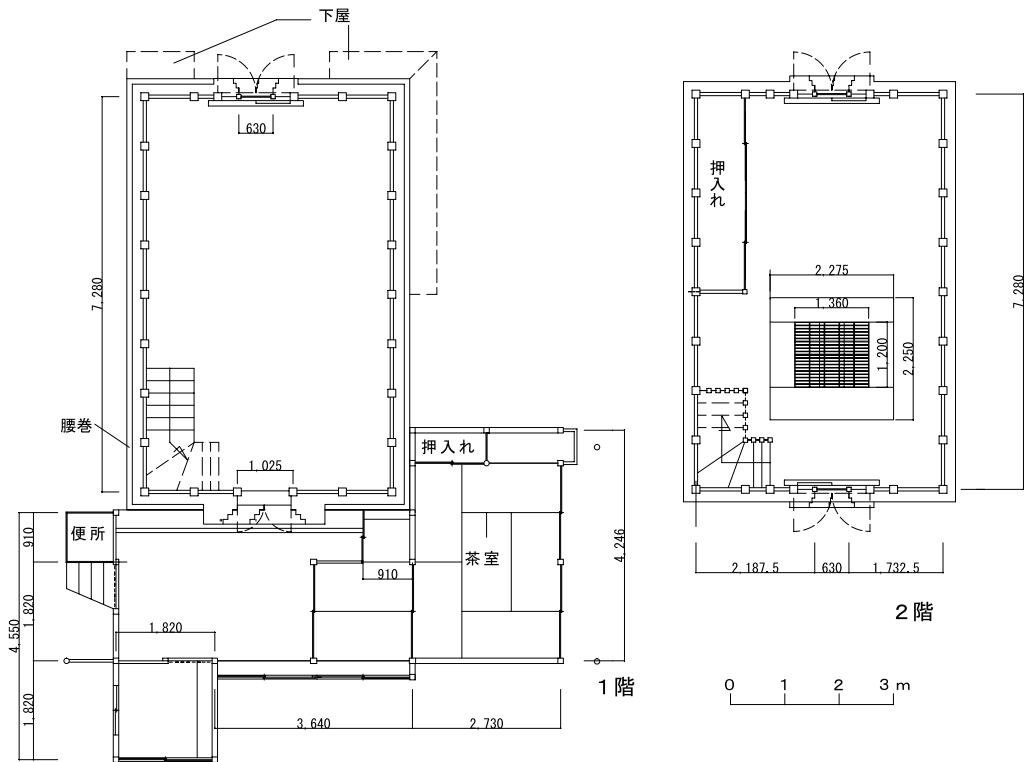


図3 村野啓一郎家土蔵A2 平面



写真3 村野啓一郎家土蔵A2 外観

音屏、漆喰塗りの片引き戸、木製の引戸で3重の戸が設けられている。1階の床は土間床である。入口左側に2階へ上がる急な階段がある。小屋組みは、梁と牛梁が架かり、登梁と束によって母屋を支えている。

土蔵A1の金蔵と同時期に作られ、柳窪集落の中で最も古い土蔵にあたる。かつては米・麦の穀蔵と



写真4 同左土蔵A2 2階内部

して利用されていた。一階部分の床高は地表面とほぼ同じであり、収穫物を出し入れするには都合が良い。下屋が大きいことも、入り口での作業に有効で

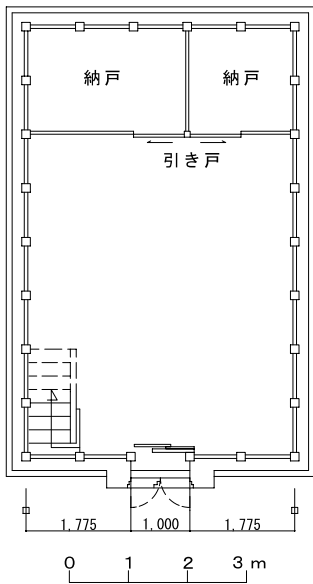


図4 村野啓一郎家土蔵A3 1階平面

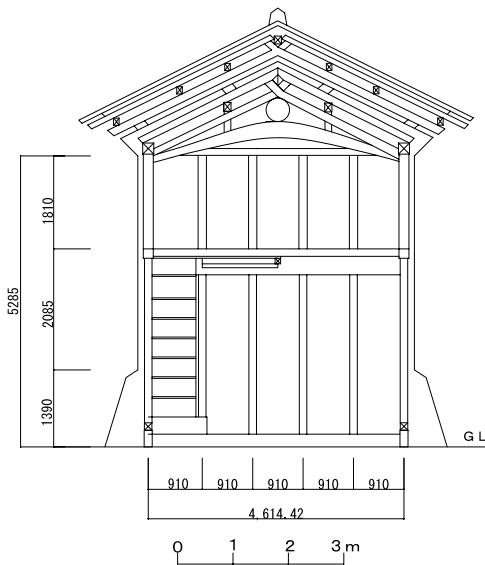


図5 同上土蔵A3 断面

ある。木製の引き戸は、上部が格子状になっており、通風を考慮した建具である。

現在、1階には荷車の車輪、唐箕などの農具や、家財道具などの民具が保管されている。近年、屋根の葺き替えなども行われており、保存状況はよい。

なお、当家は土蔵を3棟所有している。各棟はそ



写真5 村野啓一郎家土蔵A3 外観



写真6 同上土蔵A3 2階内部

れぞれ違った役割を果たし、それに対応した配置が行われている。また、3棟は規模・構造に相違が認められる。したがって、現存する土蔵3棟とも、保存することの意義は大きいといえる。

村野武敏家 B (図6, 写真7~8)

建築年代：明治30年代，規模：妻側2間・桁側3間，構造：木造，階数：2階，屋根：置屋根・切妻・瓦葺，小屋組：牛梁に登梁，外壁：漆喰仕上げ。

土蔵は、街路側からは一見すると人目につかない場所に配置されている。しかし、敷地内に足を踏み入れると、手入れされた庭の正面に主屋があり、主屋の座敷側で、奥まったところに建っている。土蔵が樹木に囲まれて佇み、印象深い姿である。このような緑に囲まれた土蔵の景観は柳窪集落によく見ら

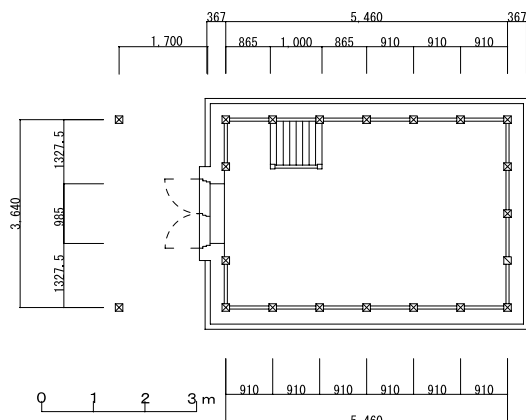


図6 村野武敏家土蔵B 1階平面



写真7 村野武敏家土蔵B 外観

れる特徴でもある。

敷地内では南西側に位置し、梁間2間×桁行3間の妻入り、正面に瓦葺の下屋が設けられている。正面出入口の観音開きの扉の下部には、紅葉の葉が左右三枚ずつあしらわれている。柳窪集落全体の土蔵は、比較的簡素なつくりが多い中、この装飾は所有者の工夫で興味深い。前庭には、紅葉の木が植えられており、蔵と自然との関係が表現されている。保存状況は良好で、土蔵の重厚感がよく現れている。

村野成美家 C1 (図7, 写真9~10)

建築年代：大正期，規模：妻側2.5間・桁側4間，構造：木造，階数：2階，屋根：置屋根・切妻・瓦



写真8 同左土蔵B 2階内部

葺，小屋組：和小屋，外壁：漆喰仕上げ。

屋敷は、広い庭を囲んで主屋と、土蔵2棟、井戸、ガレージ、物置小屋などの付属屋がある。かつては、現存する土蔵のほかに、味噌蔵や横向き蔵があったということである。この土蔵は屋敷の入口近くで敷地内の東側に位置し、「穀蔵」と呼ばれていた。柳窪の多くの土蔵は敷地内の奥に建ち、道路側からは見えにくい。しかし、この土蔵は道路から目に入る。蔵を誰もが目にするのができるのは貴重である。

梁間2.5間×桁行4間の妻入りで、正面側に金属板葺の下屋が付く。1階の床は土間床である。入口左側に2階へ上がる急な階段がある。小屋組は、自然のままの曲線を生かした梁が等間隔に渡され、その上に束を立てた和小屋形式で、梁の中央には棟方向に梁も架けられている。ここでは通例の土蔵に認められる登梁がない形式になっている。

村野成美家 C2 (図8, 写真11~12)

建築年代：明治初期，規模：妻側2.5間・桁側3.5間，構造：木造，階数：2階，屋根：置屋根・切妻，瓦葺，小屋組：牛梁に登梁，外壁：漆喰仕上げ。

敷地内の南西側奥、主屋の座敷側に近い方に位置している。この土蔵はかつて「文庫倉」と呼ばれていた。外観は、鉢巻の部分に家紋らしき㊦の字がある。2代目七右エ門は主屋を明治9年に建てていて、土蔵はその後の建築であることからして、この2代目による家紋であると考えられる。2代目の意気込みが感じられて興味深い。

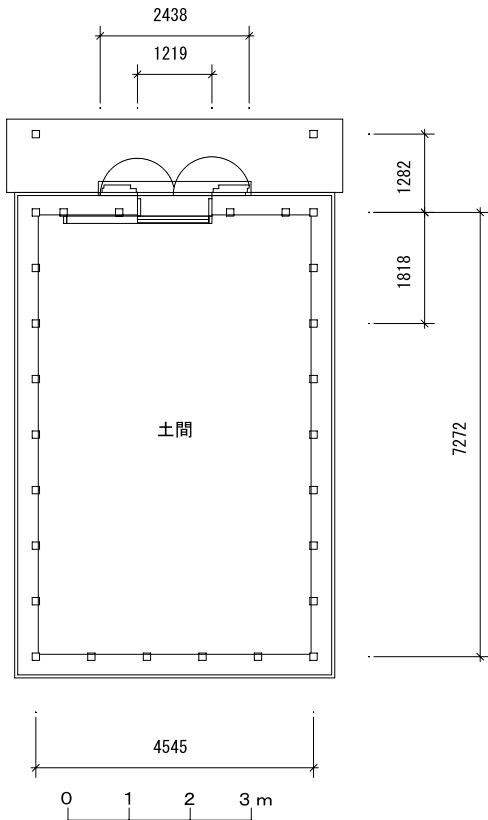


図7 村野成美家土蔵C1 1階平面



写真9 村野成美家土蔵C1 外観



写真10 同左土蔵C1 2階内部

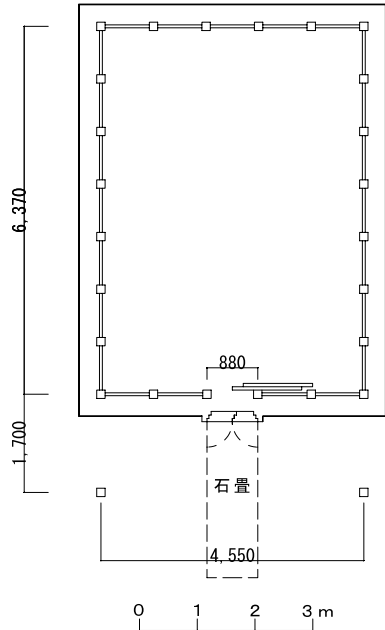


図8 村野成美家土蔵C2 1階平面

梁間2.5間×桁行3.5間で、妻入りの土蔵で、正面側に金属板葺の下屋が付く。1階の床は土間床で、入口左側に2階へ上がる急な階段がある。小屋組は、登梁形式であるが、その上の母屋は丸太が不揃いな間隔で敷き並べられている。これは、部材の傷み、欠損があって、補強、補修材をいれたことによると

のことだった。

野崎市郎・陽一家 D1 (図9～10, 写真13～14)
 建築年代：江戸末期, 規模：妻側2間・桁側3間,
 構造：木造, 階数：2階, 屋根：置屋根・切妻・金属板葺,
 小屋組：牛梁に登梁, 外壁：漆喰仕上げ。



写真11 村野成美家土蔵C2 外観

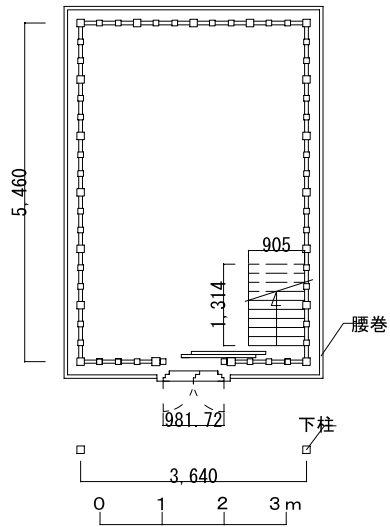


図9 野崎市郎・陽一家土蔵D1 1階平面

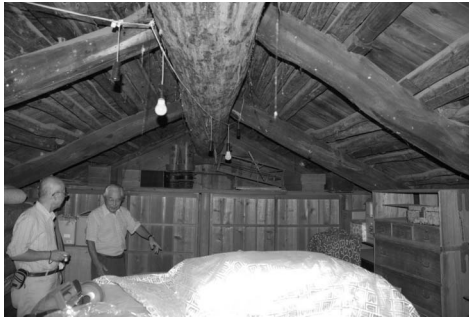


写真12 同上土蔵C2 2階内部

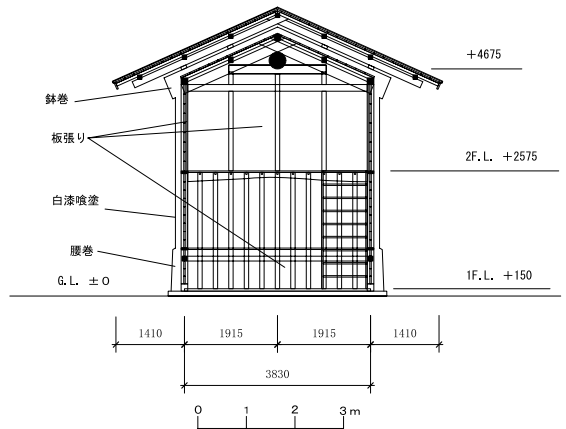


図10 同上土蔵D1 断面

主屋の正面は「にわ」として広く取られ、真ん中には井戸が残っている。主屋を中心にして、土蔵、味噌蔵、そして木小屋などの付属屋が建ち並ぶ。土蔵は味噌蔵1棟を含めて3棟が現存している。屋敷の南にある土蔵に隣接してもう1棟の土蔵があったが、昭和23年(1948年)に取壊されている。

本土蔵は主屋の座敷に近い南側に位置している。この土蔵は「側の蔵」と呼ばれ、主屋の南側から土蔵を取り囲む塀が設けられていて、その出入口となる門も設けられている。梁間2間×桁行3間で妻入り、正面に金属板葺の下屋が設けられている。1階の床は土間床で、入口右側に2階へ上がる急な階段がある。

もともとは茅葺の屋根だったが、金属板に葺替えられている。また、昭和50年(1975年)には2階内部の奥に棚が設置されている。これまでにたび

び補修が行われてきており、保存状況はきわめてよいといえる。

野崎市郎・陽一家 D2 (写真15～16)³⁾

建築年代：明治初期、規模：妻側2間・桁側3間、構造：木造、階数：2階、屋根：切妻・置屋根・金属板葺、小屋組：和小屋、外壁：漆喰仕上げ。

母屋の南に広がる庭の西側に建つ土蔵で「中の蔵」と呼ばれていた。梁間2間×桁行3間で妻入り、正面に金属板葺の下屋が設けられている。1階の床は板張りで、入口左側に2階へ上がる急な階段がある。



写真13 野崎市郎・陽一家土蔵D1 外観



写真16 野崎市郎・陽一家土蔵D2 2階内部

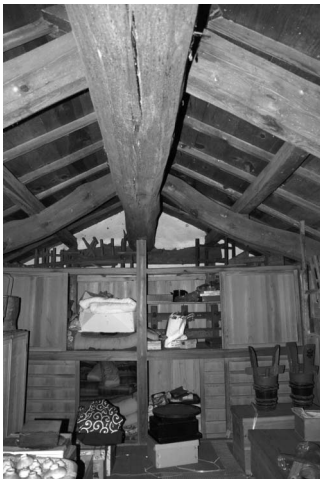


写真14 同上土蔵D1 2階内部



写真15 野崎市郎・陽一家土蔵D2 外観

小屋組は和小屋で棟木下に太い丸太が渡されている。登梁は使われていない。

2階の床梁に「関東大震災大正十二年九月一日十一時五十八分(中食時)………」という墨書がある板が打ち付けられている。また、正面下屋の柱には「昭和三十八年五月七入」と記された墨書が見られる。

外壁と内部の壁の一部が鉄板で覆われていて、応急的な補修が随所に認められるが、全体的な破損はない。屋敷に点在して配された土蔵や付属屋の屋敷構えを知る貴重な建物である。

野崎市郎・陽一家 D3 (写真17～18)⁴⁾

建築年代：明治初期，規模：妻側2間・桁側2間，構造：木造，階数：平屋，屋根：切妻・置屋根・金属板葺，小屋組：和小屋，外壁：モルタル塗り。

屋敷の入口近くで、木小屋に隣接して建っている。梁間2間×桁行2間で妻入り，平屋建てで小規模な土蔵で、「味噌蔵」と呼ばれていた。床は土間床，小屋組みは和小屋で母屋の上に丸竹が密に並べられ，屋根土の下地となっている。

壁の貫に打ち付けられた板に「昭和五十年外壁修理工費貳拾万円也」という墨書が見られる。これによって現在のモルタル塗りの外壁は昭和50年の修理で変えられたことが分かる。本建物は外壁が漆喰塗りからモルタル塗りに改変されてはいるが，基本的な部材は当初のままである。現在では味噌倉と呼べる建物として，希少な存在である。

野寄敏雄家 E (図11, 写真19～20)

建築年代：明治30年頃，規模：妻側3間・桁側4間，構造：木造，階数：2階，屋根：切妻・置屋

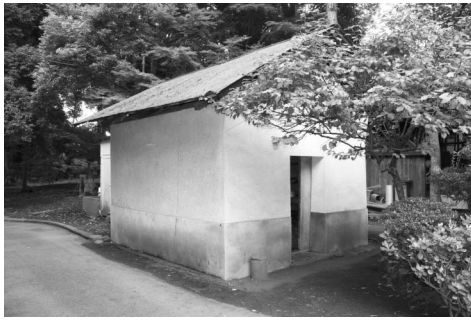


写真17 野崎市郎・陽一家土蔵D3 外観



写真18 同上土蔵D3 内部

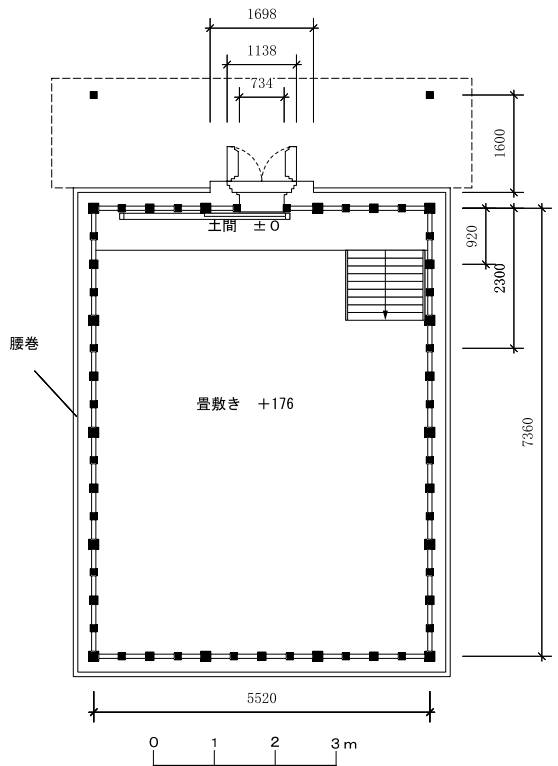


図11 野寄敏雄家土蔵E 1階平面

根・金属板葺，小屋組：和小屋，外壁：漆喰仕上げ。

土蔵は主屋の前面で，敷地内の南側に位置している。土蔵以外の建物は戦後の建築である。梁間3間×桁行4間で妻入り，正面に金属板葺の下屋が設けられている。1階床は土間で，入口左側に2階へ上がる急な階段がある。小屋組は和小屋で，自然の曲木を用いた梁が束を介して3本重なっている様子は圧巻である。観音開扉が破損しており，棕欄縄で巻かれた木製の骨組みの様子がわかる。

一部に破損や，修理による改変が見られるものの，全体の保存状況はよいといえる。当区域では規模の大きい土蔵で，重要な建物である。

奥住和夫家 F (図12, 写真21～22)

建築年代：明治初期，規模：妻側3間・桁側4間，構造：木造，階数：2階，屋根：切妻・置屋根・瓦型金属板葺，小屋組：和小屋，外壁：漆喰仕上げ。

現存する土蔵は敷地内の南側，主屋の前面に建つ。なおこのほかに土蔵がもう1棟存在したが，昭和40



写真19 同上土蔵E 外観

年(1965年)に解体されている。

梁間3間×桁行4間で妻入り，正面に瓦型の金属



写真20 野寄敏雄家土蔵E 2階内部



写真21 奥住和夫家土蔵F 外観

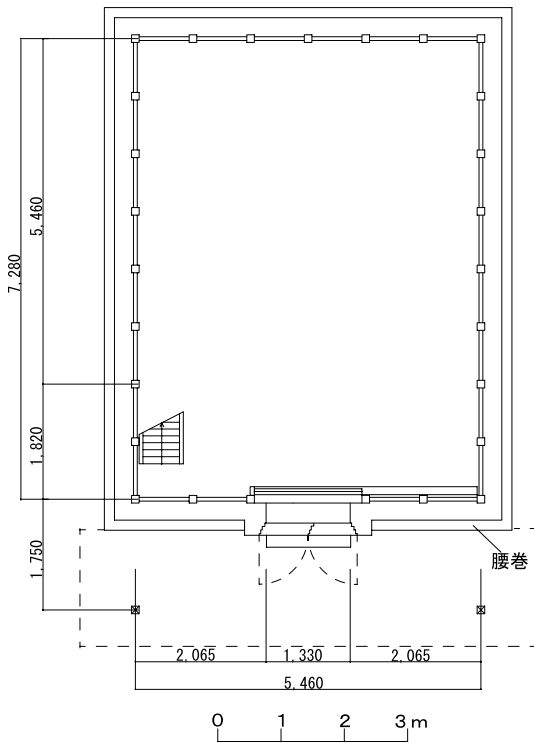


図12 奥住和夫家土蔵F 1階平面



写真22 同上土蔵F 2階内部

屋根の土蔵のはしりである。戦後は、さらに瓦型鉄板屋根と材を変えながらも、現在に至っている。屋根の形状は変えられているが、維持・管理が行き届いて保存状況はきわめて良好な土蔵である。

4. 土蔵の形式と特徴

配置 土蔵の配置について見ると、敷地内奥で主屋に隣接して建っている土蔵 (A1, B, D1), 屋敷の入口付近に建つ土蔵 (C1, D3), 上記2者の中間的な位置で庭を囲むように建っている土蔵の3タイプがある。複数の土蔵が建つ屋敷では、主屋と土蔵で庭を取り囲んだ形になる。農家において主屋の前にある庭は、作業場であった。A1の「金蔵」, C1の「穀蔵」の配置からすると、土蔵の役割が位置に影響していると考えられる。

家財蔵や金蔵にみられる共通点は、主屋の近くに

板葺の下屋が設けられている。1階床は土間で、入口左側に2階へ上がる急な階段がある。小屋組は和小屋で、Eの事例と同形式で、梁に束を立てて、大・中・小の梁が3本重なっている。

昭和12年(1937年)まで茅葺き屋根で、勾配はもっと急な45度くらいの置屋根だった。その後、茅が手に入りにくくなり、金属板葺に変えた。金属

配されていることである。奥に建つ土蔵は、生活の家財を収納している。入口近くに建つ土蔵は、農具の保管や収穫物の貯蔵に使われている。中間的な位置の土蔵は、家財であったり、農具であったり多様な使い方が見られるのである。

建築年代 土蔵の建築年代を見ると、江戸時代末期から大正期で、明治期の建築が比較的多い。明治期の土蔵が多い一因は、農村における養蚕業の発達と考えられる。養蚕業の高まりは、柳窪村に豊かな経済力をもたらした。主屋などの生活空間に変化をもたらすとともに、各屋敷において次々と土蔵が建てられたのである。土蔵は明治期以降の農家の発展、近代化を示しているといえる。

外観の形式 土蔵は2階建てで、土蔵の規模は梁間が2～3間、桁行が3～4間程度のものが多い。外観は屋根が置屋根による切妻屋根である。屋根葺材は当初茅葺であったが、後に金属板葺や、瓦葺に変えられている。戦後、柳窪周辺の開発、市街化が進められ、茅場を急速に失い、茅の入手が難しくなったのである。

外壁は白漆喰壁で、入口や窓の開口部に分厚い土の観音扉が納まり、防火建築としての形式を保持している。先にも触れたが、青梅付近には石灰の産地があり、江戸の蔵造りではその石灰を江戸まで運んでいた。運搬に青梅街道が使われ、街道近くに位置していた柳窪集落にとって、石灰の入手は容易であったと推測される。

構造 柱・梁の軸組み構造は共通であるが、小屋組の架構には相違があって注目される。土蔵で基本的な牛梁、登梁、母屋、垂木といった土蔵の通例の架構のほか、登梁を使わないで梁に束を立てて母屋、垂木による和小屋の架構が見られ、2方式で大別できる。

梁間3間と規模の大きめの土蔵（E、F）では、梁が3重に懸かり豪快な和小屋の架構を見せている。柳窪地区の土蔵では梁間2間のような小規模の土蔵の部類では登梁を用い、3間のような場合は和小屋となっている。また、梁が3重に架かるような

和小屋は明治期以降の土蔵に認められるともいえる。

5. まとめ

柳窪では白漆喰壁と周囲の屋敷森の緑との調和が、豊かな農村風景を生み出している。この地区に建つ土蔵の建築年代は、江戸末期から明治時代に集中している。観音開扉、白漆喰壁、置屋根形式、切妻屋根など蔵造りとされる基本的な形式を採用している。土蔵の規模は2間×3間から3間×4間程度のものである。屋根の葺材は、茅葺から金属板葺、瓦葺に改修されている。柳窪に現存する土蔵は、武蔵野の風景としては不可欠な要素である。さらに建物として一般的に保存状況がよく、今後とも活用が考えられるので貴重であるといえる。

謝辞

調査におきまして住民の方々から多大な協力をいただきました。またNPO法人「東久留米の水と景観を守る会」の佐藤雄二氏からは適切なお教示をいただきました。調査は鈴木研究室の方々の参加により、さらに卒論生の宍倉麻矢さんには調査資料をまとめていただきました。記して厚く感謝申し上げます。

註記

- 1) 『文化財資料集（5）—民家編—』、東久留米市教育委員会（1977）
- 2) 鈴木賢次：東京都東久留米市柳窪地区に残る武蔵野の景観、日女大紀要（家政）、56、93-102（2009）
- 3) 2008年度は未調査、2009年度に調査を実施、詳細は別稿を予定
- 4) 同上